

特集 「生き方の問題」をめぐる学問の探究とスピリチュアルな実践

## クンダリーニーの連鎖的覚醒によるシティズンシップ生成

——生理的クンダリーニー症候群（の内容および対処法）とデュルケムの集合的沸騰論

Citizenship through the Collective Effervescence of the Kundalini:

Physio-Kundalini Syndrome and the Social Theory by Durkheim

巻口 勇一郎（常葉学園短期大学）\*

Yuichiro Makiguchi/ Tokoha Gakuen Junior College

### はじめに

人や自然環境に配慮した持続可能な社会が、アノミー（欲望の無規制）の治癒や具体的な仲間意識を超えた万人の抽象的な支えあいの意識である「市民精神」（citizenship）の成立にかかっており、これらが言語的討議を経た理性的合意により為し遂げられるのではなく、各人の意識の彼方から垂直的に昇騰してくる集合力により無論のうちに見い出され生成するという社会理論は、エミール・デュルケムの『宗教生活の原初形態』をはじめとするテキストのなかで主張されている（巻口 2008）。本稿では、スピリチュアルな経験のなかで今日徐々に知られつつある、下方から沸きあがる確実な力＝クンダリーニーの連鎖的覚醒をもたらす人間観や行動パターンの変化について、各人に具体的・経験的に生ずる心理的、生理的变化（や愁訴、「生理的クンダリーニー症候群＝PKS」）の内容や対処法とともに検討する。クンダリーニーという潜勢力の持続的介入が、自分の心身や現実生活にどのような変調や変化をもたらし、そしてどう社会を変えていくのか先行研究と筆者自身の経験を踏まえて検討する。

### 1. 神話と原型的エネルギー

クンダリーニー（ ）の語根は、サンスクリット語で焼くを表す動詞のkund、穴や皿を意味する名詞のkunda、螺旋状の縄や輪を意味する名詞のクンダラであるという（Arundale 1962=1976）（Williams 2002: 290）。クンダリーニーはヒンドゥーの伝統において脊椎の基底部に隠されまた隠され引き籠もって半ば休眠し、やがて目覚めて昇昇するとぐるを3回半巻く、あるいは自ら尾を噛む根源的エネルギーの名である。Muladhalaで眠るこの蛇はシャクティ女神（大母）の象徴であり、脳と頭蓋の間のシュニーヤあるいはBrahma Randhraという空所、Sahasrara領域で待つシヴァのもとに帰還合一する神話を伴う（Mookerjee 1982: 9-18）<sup>1)</sup>。上昇するものがかつて

下降したものであるという定型はカバラやグノーシス文学にもみられる。「我々すべてはアイン・ソフ（非二元性）から現われその中に含まれている。私たちはアイン・ソフの普及を通じて生きている。それは存在の永遠性である。（中略）この過程は回転する輪の如くであり、はじめに下降しそれから上昇する」（Matt 1996: 27）。「光の全きロゴスが蛇の姿に変装し汚れた子宮の中に入り、ヌース（人間の鎖を解いた」（荒井他 1998: 335）。「これらのことが以上のようにになるとき、この世に潜む火は輝き出し、発火して、すべての物質を焼き滅ぼし…」（荒井他 1997: 237）<sup>2)</sup>。

古代ギリシャの使者の杖、古代エジプトのSekhem、カバラのシェキーナ、ベルクソンの生命の躍動、真言智拳印、チベットのトゥモ、地域時代により能記は違うがこれらには、実際に上騰する一つの普遍根源力が働いている（Durkheim 1912）（Cousens 1986）（Greenwell 1990）（Ashby 1996: 49）（Kumar 2000）。クンダリーニーはプラーナを含む全ての複数形エネルギーの創造的で静的な源である（Avalon 1974: 15）。デュルケムによれば、集合意識といえる潜在力は境遇により属性と機能を変える「ひとつの本質的に可変の神」（un dieu essentiellement protéimorphe）、「あらゆる種類の（名をもつ）神、存在の原料」である。それは、「絶対的に形容詞のない、またいかなる種類の限定もない力能」であり、最も穢らわしいもののなかにも存在する（Durkheim 1912: 343-4, 353-4=上: 348, 360-1）。それは昨日の時代人を活気付けるだけでなく明日の時代人も活気付ける、あらゆる信仰の共通原理である（Durkheim 1912=上: 341, 346）。これは、幻覚（対象なき知覚）、文学や思想・信仰ではなく、正当な（廃れない）思想や宗教の共通原因となっている根源エネルギーのあらわれ、A.マズローがcore-religious experiencesとよぶ生理現象であり（Maslow 1964: 20=1972: 27）、健全者ならば同じような内容（節度）を備えている（巻口 2008）。Wilber（1983）は適切に瞑想的修行を修了した段階の人々は、各自の主観の深部公共領域に至るので共に結果を確かめ検証できると考えている。

\* Email: spirit8mackie@yahoo.co.jp

## 2. クンダリーニーの生理

古典を鵜呑みにすることは、クンダリーニーの科学を空想の世界に引き入れることになるという見解がある (Krishna 1983: 211)。共有可能なレベルの真正の直接経験や臨床報告に照らして批判的に古典を眺め検証する必要はある。ヨガ経典を基にした研究によれば、クンダリーニーは、妊娠1ヶ月目においては受精段階から脊柱の形成や、あるいは成体までの発育過程における痕跡的系統的反復を導くなど、自らが宿る肉体の形成に関与する知的エネルギーであり、その後生涯にわたってフロイトの性器統制やダーウィンの成熟しきった西欧近代という段階を越えて人を成熟・進化させる究極力である。クンダリーニーは安定した家庭、社会となり、銀河となって、諸個人や星をくまなく統合する (Sovatsky 2009)。

ヒンドゥーやアーユルヴェーダの文献によれば、無数の微細ナディ (= 流れ) のなかで最も重要なものはムラダーラ (と連結する Kanda ポイント) から始まるスシュムナー (Sushumna)、イダ (左の鼻孔で終結)、ピングアラ (右の鼻孔で終結) の3本である。イダとピングアラはスシュムナーを4回交差する。ムラダーラとロータスで結節されたチューブであり脊髄のなか (あるいはすぐ後ろ: Cousins 1986: 78) に位置するスシュムナー・ナディにおいて、左半身のイダ・ナディにおける女性性、右半身のピングアラ・ナディにおける男性性が交じり合うと摩擦熱が生み出される。これによりクンダリーニーが刺激され覚醒すると、イダとピングアラを含む一切のナディの働きが止まり、スシュムナーにどっと流れ込むと考えられている。目覚めたクンダリーニーは、スシュムナーの内層であり脊髄を貫く更に微細なバジリニ (Vajrini)・ナディ、更に内層で夢をつかさどるチトリニ (Chitrini)・ナディ、そして最も中核の清浄で微細な (コーザル体に属する) ブラフマ・ナディを上昇するという見解も存在する (Dale 2009)。チトリニあるいはブラフマ・ナディはチャクラを係留しており、それらの交差点は結節 (knot) となっている。結節には5人の神が住み、過去から現在までの個としての魂の記録が詰まっているという (Johari 2000)。クンダリーニーが神の目覚めと協和をもたらし魂の記録を浄化しながら、より微細なナディを通して (自我の) 垣根・結節を垂直方向に貫くことで、ブラフマンとアートマン (やトリグナなどの局所性) は再融合され、漸進的に宇宙的全体性の優れた統合意識 (Mahabindu, Siva-Sakti)、空が出現する (Rama 1979=1983: 37)。こうしてクンダリーニーは、部分対極を繋ぐ橋、紐帯、支柱となる (Mookerjee 1982: 59-89)。

チャクラの表層には「粗大ナディ」とよばれる任脈と督脈が位置する。クンダリーニーは、経絡における気の流れとも関連する。近年の臨床的報告によれば、クンダリーニーは古典文献の指摘のように仙骨に始まり頭頂 (ひよめき) か

ら抜けるのではなく、足から入り上昇し仙骨を通過し頭頂部に至り更に顔面とのどを下り腹部のポイントで終結し、そして背骨内部の感覚はかすかなものにすぎず知覚し難いとも主張される (Sannella 1976: 55-6) (Mookerjee 1982: 82-3)。これはマイナーなナディや、中国でいう真気の積気衝関、小周天 (趙1997: 124-31)、あるいは身体を複雑に巡行する大周天の一部の感覚とも思われ、Sannellaはこれらの感覚はクンダリーニー完全覚醒の一部に相当すると推測する。確かに、気功における任督脈の気の上昇や回転やムラダーラチャクラ覚醒とクンダリーニー覚醒は感覚的に似ている。しかしクンダリーニーは背骨中心の圧倒的に力強く不随意的な動きであり、体表の比較的穏和で随意的な気の循環ではない (Saraswati 1984: 76) <sup>3)</sup>。クンダリーニーは、より粗大な身体を衣にまといつつも中心部を貫いてくる。

精妙次元の解剖学的に3本の導管は誰にも存在するので、クンダリーニー覚醒は信仰や宗派に依存しない生理現象である。私が自分の背骨や頭頂部を突きあげる強烈な力がクンダリーニーであると知ったのは昇騰感覚が小学校1年生で現われてから20年程たってからのこと、学生時代、半信半疑で試したフラワーエッセンスにより体知覚が変化し驚いてからであった。それまでの私は唯物論者で、不可解な身体感覚については自分が西洋医学的な整形外科的疾患、内分泌 (視床下部等) の器質的異常、のぼせ、脳血管拡張を抱えているからだと思っていて病院を転々とし、将来への希望も失っていた。

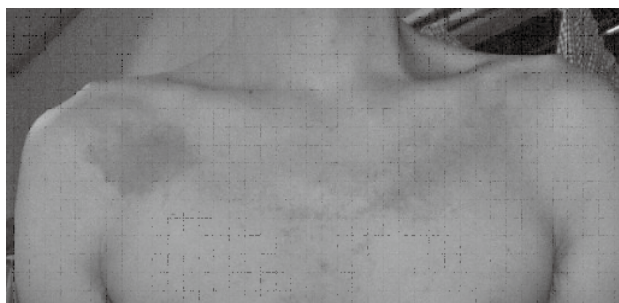
クンダリーニー上昇を私なりに表現すると「消防ホースを仙骨に繋がれ、そこからコック全開で頭頂に向け全開で放水されている感覚、背骨ラインが裂けてあの生命、マグマがほとばしりである感覚」である。あの形容するのはそれが何か懐かしい記憶に思えるからである。デュルケムもこの表現を用いている。クンダリーニーが蛇に象徴される訳は、背骨を太い蛇が這いあがっていく、その鱗が擦れざらざらする感覚や音が実際に生ずるからである。このエネルギーは沈潜状態で滑らかに運行するが、心身に緊張があり外部へ意識が散ると捕らえられて渋滞する。この点に関して、精神的、感情的ストレスによりチャクラを含め微細身が濃密化すると、外部の源泉から通常もらっている活動エネルギーを補給できなくなり、その代わりにクンダリーニーからより多くを補給する必要性があるのであるという考えがある (Cousens 1986: 192)。クンダリーニーブロックは視覚的に柱のプロッコリー化と表現される (Genevieve 1991: 28)。私は幽閉され、あがいても出られない状態と表現したい。Genevieveによれば、鳩尾ブロックは感情の問題を生じ胃潰瘍の原因ともなる可能性があるほか、胸部ブロックは心臓の問題、頭部ブロックは精神的な問題を生み出すという (Genevieve 1991: 13-18)。共に首や腰から下は冷え固くなり、夜船困話の禪病との共通点をもって

る。私は小学校低学年で自然に首が左に曲がり、このとき首を素早く左右に振ると渋滞していたものが放出され楽になる経験をもった。整形外科の問題かチック症を疑われ低周波治療を受けた。これは、右半身のピンガラの働きがイダよりも優位であったために起こった無意識的動作のように思われる。Saraswatiによれば、健常者では対立ナーディーの優位性は周期的に交代するが、この循環が現代の物質・ピンガラ優位の社会生活の影響によって止まった場合<sup>4)</sup>、不均衡が生じ以下の愁訴の一因となるとされる<sup>5)</sup>。クンダリニーの正常な上昇には安定とバランスが要求される。なお、カバラの文献が示すように、西洋においてもこうしたクンダリニーブロックの存在は知られていたと考えられる。

「心霊の中樞は脊髄の領域に位置しているが、実はエーテル体の表面にまで拡がっており、肉体そのものより約10センチほど大きい。(中略)脊髄の中にある中樞には絶対に集中してはいけないということである。そこには眠っている霊的エネルギーが存在しており、もし未成熟のまま目覚めて立ち上がると、非常に耐えがたい結果を引き起こすことがあるからである。(中略)君が意識を集中しなければならないのは、このオーラにおける表面の点であって、脊髄の中にある本物の中樞そのものではないということ思い出してほしい。」(Butler 1962=1979: 164-5)。

### 3. 生理的クンダリニー症候群における不定愁訴と心身変化

先行文献や私自身の経験に照らし、準備がない尚早(premature)なクンダリニーの覚醒(awakening)や症状(PKA, PKS)の一部を列挙する。深いレベルでの関心や準備がない人にクンダリニーが目覚めることはないという見解がある。覚醒はクンダリニーの知性によってコントロールされている(Cousens 1986: 25)。そうするとPKSといえどもあるところまで準備が整った人だけに起こりうることになる。クンダリニー覚醒に関しては、



胸部ブロックにより脇にそれたクンダリニーが皮膚に赤い炎症を起こした状態(2009/2)

「自身の思い込み」が多いとされ、他の病気との症状のうでの共通点も多く、見極めが難しいことから、研究者らは識別の基準づくりに苦勞している。斜体はPhysio-Kundalini Syndrome Index (Greyson 1993) 掲載項目で、太字は臨死体験者に共通する項目である。エネルギーの足から頭頂部へ向かっての突き上げ感覚があり(体知覚 somatosensory 症状)、それが理由なく奇妙な姿勢になり動けなくなることや未知のヨガの姿勢、舞踊、止息を自動的に生み出すことがある(motor symptoms)。説明不可能な体温上昇(これは一般人にも共通しておりPKSの特徴とすることは難しいという主張がある Greyson 2009: 179)、痙攣や脈動振動感、蟻走感、痒み、他人や無生物を焼き影響を及ぼすほどの熱く冷たいエネルギーが渦巻いたり流れる身体感覚(とその部分の炎症と痒み:写真参照<sup>6)</sup>、手足の感覚麻痺や過敏、心房ブロック、心臓発作や心臓が下方から押し上げられる感覚、胃腸炎、下痢や便秘、泡のような唾液の分泌や乾きと菌茎からの出血、大量のげっぷ、食欲不振と亢進の繰り返し、嗜好の変化、腰や背骨周囲など特定部位の突発性の痛みや硬直(脊柱の湾曲)、鼻づまり(時に左右アンバランスな)と目の充血(ざらざら感)や目の奥の充血感、脳みその中心に雫か露が詰まったような拡張閉塞感(のぼせ)とそれによる不眠、妊婦のような腹(仏陀の腹)、足の右の親指の黒色変化や出血、急性慢性の疲労、神々しいか悪魔に憑かれる夢、記憶や潜伏していた病気や人格の浮上(にともなう多重人格的、統合失調症的症状)、感情の激しい起伏、罪業感、神経過敏(音や他人の言動、気持ちに敏感で興奮したり感動したりする)、痲癩や狂気の沙汰(逸脱行動)、思考の加速や減速による不用意な行動や物忘れや忘れ物(背骨や頭の中にばかり注意が向く)、睡魔、一時的な性同一性の障害、異性愛と同性愛の交替(あるいは両性具有)、内的な光や声、流れる霧の幻視、脱自・目撃傍観者の視点、内空の凝視による不動の眼差し、活力や執着の減少(あるいは異常な増大)、どちらの選択肢でも構わない態度、仕事や友人や人生の方向性の混乱、性欲亢進(による自己嫌悪)や減退(に伴う独身主義や夫婦間の問題)、突然の強烈な絶望感と抑鬱や至福恍惚絶頂感と宇宙的統合、肉体より大きな自分の感覚などの不定愁訴や擬似病(pseudo-illness)状態(mental symptoms)、意識変化が生ずることがある(Sannella 1976: 44-51) (Mookerjee 1982: 71-100) (Saraswati 1984: 86-92) (Genevieve 1991: 4-26, 213-4) (Greenwell 1999) <sup>7)</sup>。また、クンダリニーが折り返し下降すると足が麻痺したり、何年間も寝たきりになる危険性が高い(Genevieve 1991: 25, 190) <sup>8)</sup>。15人を対象とした個人史的事例研究によれば、愁訴内容、期間は多様であり、その個人差は、潜在しているブロックの位置や個人の遺伝的、歴史的な相違によるか(Sannella 1976: 43)、対極の不均衡による(Saraswati 1984: 67-8)。私は、体が氷のように冷たくなった後に急に

火のように熱くなると呼吸が速くかすかになり（グレイソンによれば火の呼吸、自動止息は臨死体験者の39%に、精神病患者の29%に、一般人の20%にみられる）、布団に頭から足までもぐりこむと、無意識に独特のアーサナに導かれる。そこで沈潜を維持しながらできるだけ止息するとエネルギーの滞りがとれ、滝のような汗とともに流れ出るという経験を毎日4～8回、10年以上も続けてきた。このため毎日洗濯ものが大量にでる。平日は3時間、週末は4時間以上、まるで高峰へ登山をさせられてきたかのようである。クンダリーニヨガに時間を割かないと不釣合いなほどの辛さが待っていたので様々な用事や計画を諦めた。長期のPKSにより疲労困憊し食欲も落ちるが、不十分な覚醒状態で断食に入るとなお悪い。そもそも無理のない自然な生活を容易には営めない現代社会においてベジタリアンの食生活をするにしてもバランスが重要であろうし、ただPKSをやり過ごすだけでも重労働である。また、「身体浮上」についてであるが、まるで隣の電車が走り出すのを見て自分の電車が動いているような錯覚をもち驚くことがある。Mookerjeeは実際に重力がうち消され肉体が浮上する説を裏付ける証拠は豊富にあると述べるが、私の経験のように錯覚の場合もある（Mookerjee 1982: 78, 72）<sup>9)</sup>。

また没入過程の途中では耳鳴りとは似て非なる、フルートの音より澄んだ高音階が聞こえる（幻視を含め audio visual symptoms）。モーター音のような轟きやベルや蜂の音や孔雀の鳴き声ともいわれる（Mookerjee 1982: 71）（Saraswati 1984: 87）。緊急事態を医師に訴えても、まだ医学的に spiritual illiteracy の段階にあり理解されない可能性もある（Randal and Argyle 2006）ので、コカインの急性中毒症状と間違われることすらあろう（Ossoff 1993）。クンダリーニと精神病との関係については3つの立場がある。1）クンダリーニ覚醒やその不適切な処置が精神病の主原因となるという説、2）予め精神病にかかりやすい傾向があったり既に境界例、自己愛的な病理に苦しんでいる人にもクンダリーニ覚醒に先立って精神病が現われるという説、3）精神病に特徴的なエゴの弱体・欠損が真正のクンダリーニ覚醒を生じさせたり擬似クンダリーニ症状（精神生理学的エネルギー現象）を悪化させるという説である（Greyson 1993: 48）。

Goretzki, Thalbourne, Storm (2009) は、109人の一般人を対象とした尺度調査から、精神病的症状経験の指標とクンダリーニ、臨死体験や過去生経験を含む10の因子項目からなる霊的覚醒の指標との間に強い相関があることを発見し、重度の精神病と霊的覚醒経験は同じもの、あるいは同じ現象の違う側面に過ぎないと主張している<sup>10)</sup>。

しかし、精神科医・眼科医のSannellaは、クンダリーニ症候群は精神病にみられない客観的状态を伴うと主張する（Sannella 1976）。クンダリーニの生理にはじめて注目し、PKSという概念を提出した医用生体工学者のBentov

(1988) は、心弾動計を用いて実験をした。その結果、クンダリーニ覚醒は精神異常とは異なり、変性意識出現が被験者の生体リズムや磁場更新と連動すると指摘する。医師のグレイソンは、19の生理クンダリーニ症候群項目のなかで死にそうになったが臨死体験をもたなかった55人を含む一般人（n=168, mean age=48, 8）には4.6項目が、入院精神病患者（n=138, mean age=34）には4.9項目が該当したのに対し、臨死体験者（n=153, mean age=50.3）には平均7.6項目が該当し、有意差がみられたという分析結果を得た<sup>11)</sup>。重複項目もあるが、この調査結果からクンダリーニ覚醒と精神病との混同は許されないことになるし、精神病患者の多くがクンダリーニ症候群を誤診されているというベントフらの主張は退かれることになる（Greyson 1993: 50-7）。クンダリーニが優勢な患者の場合は自分に何が起きているのか重大な関心をもって冷静かつ客観的に分析しようとする積極性が高く失われまいといわれる（Sannella 1976）。病は気からと言われるように、クンダリーニ覚醒と精神病に関しては、重なり合っている部分があるだろうし、現段階で相当程度の区別ができると思われるが、そうであるとしても両者が相互作用しているケースも多いように思える。答えを出すには時期尚早であろう。

また321人を対象とした尺度調査によれば若い世代ほど、女性ほど、大学院レベルの教育を受けていない人ほど生理的クンダリーニ症候群を経験している（Greyson 2000: 128-9）。学歴との相関に関しては、勉強に集中するほど緊張し覚醒が抑えられると解釈するより、PKSが勉強集中を阻んだと解釈したほうがよいであろう。また、170名以上を対象とした自己申告式の尺度調査によれば、生理的クンダリーニ症候群を経験する人ほど鮮明な心像・イメージ形成力を持ち、創造的で、苦痛から離れることができ、内的空想的生活を楽しめるという（Greyson 2000: 128-32）。クンダリーニ覚醒者の、直感を活かし独自の道に進む人物像が想定され、こうした人は画一的な現代教育に苦痛も感じてしまうのかもしれない。最後に、こうした生理的指標はクンダリーニの深遠な霊的側面を平板化しており、PKSは単にプラーナによる影響のことを表しているに過ぎないという見解がある（Greyson 1993: 44）。

#### 4. スピリチュアルイマージェンシーという非日常の日常への強制的介入

Sannellaによれば霊的緊急事態を最も引き起こすのはクンダリーニである。クンダリーニは緊急事態を引き起こすほどの強度・持続性・拘束力を持ち各自の人生に介入する。普通の生活ができなくなる点でPKSは当事者にとって厄介な緊急事態でしかないが、これは日常の自明性を疑い新たなゆとりあるライフスタイルへの転機をはかること、すなわち過去への決別、移行、再生、あるいは浄化とバランス回復へ向けた自動的な準備であると解釈できる

(Sannella 1976: 11-2, 59)。

事故や事件は覚醒の要因と同時にブロックの要因になる。たとえば、私の場合、流感などで高熱の状態では普段にもましてクンダリーニが活性化し上昇力が増大するが、同時に辛さで心身が緊張しクンダリーニの流れが滞る。これまで高熱で数回、頭が吹き飛び破裂しそうな感覚に数日間苦しんだ。このときの思考は明晰で、この感覚に耐えながら生きていくのは困難だと合理的に判断したが、我慢していると治まった。また自分が辛く理不尽な目にあつたとき、クンダリーニそれ自身は何ら影響を受けず怒ったり喜んだりもしないが、感情と心身の緊張によりブロックができてクンダリーニが下方に押し込められる。怒り、悲しみによる下方でのクンダリーニの渋滞は、食欲や性欲の異常な高まりや陰部の痒みを含むPKS症状を生ずるので、無条件に症状の引き金となっている現状を肯定することは難しい。毅然とした態度を示し自らの意見を述べて思うように行動し、手放すべきは手放し現実を調整し、その過程で自分自身の欠点や弱点と向かい合わなければ、身体下方を緊張させている怒りや悲しみは開放されない。クンダリーニは、より深くの感情や思いを押し上げ浮上させ、人を我慢のないこどものように、情緒的に不安定でヒステリックに、乱暴で逸脱的に、あるいは直感的で勇敢に行動させる。総じて自分らしく振る舞うことが浄化になり、クンダリーニを解放する。無理を強いる管理型の現代社会や組織はクンダリーニの蓋である。本来の自分に戻るよう、その上に被せられた仮面を剥ぎ取ろうとしてクンダリーニは一方的に圧力をかけ燃えあがる。覚醒がなければ心身のブロックは苦痛ではない(暗闇で障害物は見えないが照らされれば見える)。不安的な感情を含むPKSの症状は、クンダリーニの上昇に先行して先に押し出されるものであり、これは自分や周囲にとって迷惑であり、慣れ親しんだ固定的生活に大小の危機をもたらす。当人は身体内部の存在による圧力のために、逃避できず立ち向かうこと、状況の改善を意に反してまで迫られるが、クンダリーニが無事に上昇することが最大の関心事になってくるのでそれも仕方ない、そしてやがては望ましいと思えてくる。

## 5. 必要な困難

心身のブロックはクンダリーニを眠らせることで、各自が環境に対して境界をもつシステム=自我であると感じさせる働きをしている。クンダリーニは少しずつ上昇し、いつまでも境界維持的に閉じた自律運動を続けようとする自我の障壁を掘り進む。Ossoffは、肯定的な過程であるはずのクンダリーニ覚醒がなぜ絶望的奮闘と精神病的症状をもたらすのが最大の疑問であると述べている (Ossoff 1993: 34)。Irvingは、4人の経験談を検討し、クンダリーニは魂を盲目にする無知の残余物を焼いた後にはじめて、狂気から肯定的な夜明けに転ずると主張する (Irving

1999: 83-106)。クンダリーニ症候群は苦痛であっても、クンダリーニ覚醒の長旅の必要な第一歩・肯定的プロセスである (Sannella 1976) (Walters 2009: 13-6)。Genevieveはほぼ全てのケースで、クンダリーニが深遠な世界観、共感や創造性を発達させる啓発教育目的で、まず敢えてうつ状態(精神病的・化学的鬱ではない)を用意し、死生観を変化させるために自殺願望すら生み出すと主張する (Genevieve 1991: 17-8)。

社会心理学者のRing (1992)は臨死体験者(n=74)が36%の、対照群(n=54)が11%のクンダリーニ因子項目(全9項目)に該当したという調査結果から、クンダリーニは臨死体験の根拠をなすエネルギーであり、臨死体験によってクンダリーニ覚醒が誘発される(=NDE後遺症)と考えている。グレイソンは、321人を対象とした調査から19項目のクンダリーニ症候群Indexのうちmotor and mental symptomsを主とする10項目が、対照群よりも臨死体験者に共通してみられることから、同様の結果を得ている (Greyson 2009)。クンダリーニは、本人が死なない程度の苦難を小出しに与え見守るスパルタ教師のようである。本人が困難を乗り越える度にエネルギーが繊細かつ純化されたものになり (Walters 2009: 15)、柱が徐々にゆるぎないものになってくる。苦痛によってブロックが大きくなれば、それに応じてクンダリーニの力もまた大きく強くなる可能性がある。

天に花を咲かせるためには根を深く泥のなかに下ろす必要がある。医師のウィットフィールドは、暗闇を迂回しようとするクンダリーニが何度も引き戻すと述べている (Whitfield 2009: 170)。ユングは、秘儀伝授と同時に暗い地下世界、怪物に飲み込まれる危険のある洗礼の泉、孤独や沈黙、不浄を潜り抜ける経験、慣れ親しんだ価値観の崩壊が投影された世界没落体験をもつ必要があると述べる (Jung 1932=2004: 80)。シュタイナーは「秘儀に参入するものは準備として、ありとあらゆる自制、苦悩、苦痛、悲劇的なものを通過しなくてはなりません」と述べている (Steiner 1958=1996: 224)。ターナー (1976=1997)の口吻にしたがえば、辛苦は人を日常と非日常との敷居(limen)の上へ押しやる。益翁は謙信に対し「真に禅を会得せんと欲するならば、命を捨てて直下に死の穴へ飛び込むことが必要」と述べる (鈴木 1938=1940: 52)。本性の自覚に到達しない禅は、「根のない立枯れ禅」とよばれる (直木 1975: 126)。中毒、病氣、過度の瞑想、分娩、過労や仙骨付近の怪我、臨死体験の只中でクンダリーニの封印は深く解かれるが、ただLSDなどの薬物による覚醒(や対処)だけは(偽であり)、計画外のアクシデントとなりうるので、当人が水面下の諸々の諸力に飲みこまれ溺れる危険が高く、その場合クンダリーニは墮胎してしまうとされる (Genevieve 1991: 10-3) (Greyson 1993) (Irving 1999:46-59, 161-6) (Morgen 2008) (Whitfield 2009: 165,

168)。一見、反社会的乱交にみえるタントラも、誘惑 (Genevieveによれば過度な前戯はクンダリーニを誘発する) に抗って静寂のセルフに到達し、子孫を残さぬ不毛の結婚を目指す、不断の警戒を要する最難関の行である (Serrano 1983=1984: 122-34)。窮すれば通ず。孤高のなかでこそ、疎外され切り捨てられたかに思えた自分と常に切れ目なく連続する一者を自覚する。それは分離と統合の対極が出会い「知れる」ときである。艱難は産みの苦しみであり、不完全性のなかに完全性を見出す寛容さを育む。クンダリーニは、貫通する対象である自我 (ブロック) という内閉的システムとの確執を通してこそ、自己認識を明晰化する (巻口 2008)。

## 6. クンダリーニの介入による自我相対化 (=トランスパーソナル)

いよいよ頭部に達するクンダリーニは「パチ、シュワ」(the sound like fizz)、「コン」という録音可能な音をたてながら頭頂部の殻を突き破り始める。この呪縛から逃れようと人はあがくが、蛇の執拗さを前に無駄な抵抗に終わると人生を狂わされたような気分になる<sup>12)</sup>。だが、結局は諦め、むしろクンダリーニに身を任せるようになる。ユングは、恒常不変の究極力、「靈魂」(der Geist) とよべるヌーメンに関して、「それはしばしば途方もない情熱と容赦ない徹底ぶりによって、自らの目標へとせきたてたり主体を呪縛したりする。主体は必死に抵抗してもこの呪縛を解くことができず、しまいにはもはや解こうともしなくなる」と述べる (Jung 1952=1992: 199, 318- 9) (Jung 1999: 175, 335-43)。

クンダリーニは、目標もなく戯れに遍満するために遍満する必要を感ずる奢侈的で知的な力でありながら (Durkheim 1924: 133=1985: 125)、ときに目的意識性をもって活性化され「自らの堅固な意志」を貫徹しようとする方向性、制度、力能 (Pouvoir) として機能する。クンダリーニは、変動を求めてやまない力として自らブロックを掘り貫いて世俗に積極的に介入する。これは、人間の意図や目的に従って (たとえばヒーリングに) 容易に利用できるような、方向性が欠如しているか顕在化していない脆弱なエネルギーの業とは異なっている。魔術においては召還したエネルギーが人為的に作成された (往々にしてオートポイエシス的) 回路に沿って流れるが、クンダリーニはその鑄型自体を突き破り貫く硬さ、すなわち対立する境界維持的な諸物を関係づける力をもつ。自我に従属するエネルギー (や不十分なクンダリーニ) は随意的で方向性が弱く、貫徹力のない (弱い) エネルギー=素材 (hylê) であり、手段化可能である。クンダリーニは、平凡な誰ものなかで部分的にであれ覚醒し彼らが気づかない低い穏やかなものを表出している (Sannella 1976)。それは、自我を膨張させ (独自の解釈とその相違による対立を生み出し)、

イメージ力など様々な能力向上や社会復帰という日常的目的のために利用できる。他方、(十分な) クンダリーニは、もはや傷つけることのできない石のような固さにおいて不随意性=意志=知性を表す。それはびくともしない (invulnerable) 固さをもち、容易には水路づけたり規制したりできず、だからこそ自我に従属せず逆に自我を相対化でき、主客を貫き統合に導くことができる。トランスパーソナル (=個を超越する) とは、堅固な力の強制的介入による現代的生活の困難 (離脱) を意味するのであり、曖昧で脆弱なエネルギーの応用による自我という陣地の維持拡大とは異なる。今まで中心であり全てであった自我が不可視の気骨に貫かれ局所化、相対化され、その結果として人格変換が生ずる。

また、クンダリーニは本格的に覚醒すると人の気概となり、もはや後戻りは不可能 (=不可逆) である (Genevieve 1991: 190)。すなわちクンダリーニ覚醒は、「永遠」のエネルギーシフト、意識の「終生」の変化、物事の見方やライフスタイルを大きく変える「継続的・持続的」な力 (Greenwell 1990: 16)、死後までも生き続ける「一定不変で持続的な意識状態」(Serrano 1963=1984: 133-4) である。グレイソンは、PKSを越えたクンダリーニ覚醒の真の指標 (true measure of kundalini awakening) として、「持続的」な高い意識状態 (enduring state of higher consciousness) をあげている (Greyson 2009: 182)。クンダリーニは障壁を除きながら漸進的に上昇し「持続・安定」する。だから、正常なクンダリーニ覚醒とは自我を彼方に追いやりあるいは滅して悟ったかと思うとそれが途切れ我に返り、その間の記憶が途絶える脱自・忘我恍惚、間欠型の神秘体験ではない (Saraswati 1984: 74-5)<sup>13)</sup>。二つのリアリティーのどちらか一方へ瞬間的に往来する「二者択一型」、過去の超越体験を現在の自分がいぶかったり振り返り解釈する回想型の認識ではない。デュルケムがいうように目の前の物理的現実 (gross body) に付加 (surajouter) され重置 (superposer) されたもう一つのリアリティーを、日常意識を維持したまま途切れることなく感ずる現在の重層的経験である。日々怒り悲しみながら自らの全身で、この時間と場所で同時に、それらの影響を受けつつ同時になんら受けずにただあるもう一つの自己を並行的に経験する。

## 7. 個人的努力と集合意識としてのクンダリーニ

クンダリーニに対処するために強力な薬物療法を受けた患者の事例報告や、PKS緩和のためにセラピー・身体技法が有効であるという報告があるが (Ossoff 1993) (Greenwell 1999)、どの技法が最も有効なのか十分な臨床データが見当たらない。どれが有効かはまさに人それぞれであるという臨床家の見解も多い。漢方鍼灸気功<sup>14)</sup>、パンチャカルマ、ヨーガ、レイキの専門家や僧侶であってもク

ンダリニーは各自の専門領域外となるようで、クライアントのクンダリニーをたとえ感じたとしても概念的に否定したり（悪魔の仕業などと）文脈依存的に解釈をしまい対処できないことが（欧米でも）ほとんどである（Whitfield 2009: 165）。学際性とニュートラルな感覚的立場が必要である。イダとピンガラの不均衡を左か右の鼻孔を通じて呼吸することで調整する方法、濡れた土の上に裸で横たわりアースする方法、冷水中に首から下を沈める方法などが暴れるクンダリニーをなだめるとされるが、私は緊急時にはクンダリニーをなだめる口伝のマントラを唱え静養しながらホメオパシーを補助とし、メインにはブロック解放やクンダリニー正常化に焦点を絞ったエネルギーワーク<sup>15)</sup>を用い、また労働環境やライフスタイルという現実生活の改善を含め総合的に対処してきた。

これら技法は、クンダリニーを刺激せずブロックのみを浄化するもの、クンダリニーを刺激し同時に浄化を促すものなどに分類でき、クンダリニー覚醒に焦点を絞り、絶対菜食主義や断食を理想とする栄養補給指南書も存在する（Cousens 1986）。自然な成り行きに任せる人には浄化技法が良いし、積極的に修行したい人には後者の覚醒技法が良いが、これらを駆使したとしても思い切る必要や、その人にとっての時期があるのだろう、浄化や覚醒をさせることが難しい場合が多い。たとえ修行を積んだとしても、クンダリニーは人為的・意図的な修行によってことさらにこしらえるものではなく、自身の準備状況に応じて自然にそうなるものようである（Cousens 1986: 25）。畢竟、向こうに委ねる心境になってくる<sup>16)</sup>。むしろこれら身体技法は、既にある自身の症状が、西洋医学的な範疇を超えたエネルギー的なものであることを知るきっかけとなる<sup>17)</sup>。エネルギー的技法が、目だって症状の状態に変化をもたらすかどうか真の目覚めとPKSの診断基準の一つとなりうる。

私は、①背骨を中心としたエネルギーの上昇感覚（あるいはそれが詰まった感覚）、②震える生命と物理的肉体が重なって存在している感覚、③ブロックに伴う出血や皮膚の炎症や腫脹、エネルギー放出に伴う録音可能な音（一定の段階に限られる可能性がある）など特有の観察可能な事象、④クンダリニーに焦点を絞ったエネルギーワークやマントラが効果を示すこと、⑤自動的なヨガのポーズや舞踏、⑥人生観と日常生活の混乱や刷新（自己への強い関心）、⑦以上が不随意的（介入的）で永続的に起こること、⑧他の病気等の原因がないことなどがPKSを含むクンダリニー覚醒の指標になりうると考えている（②はかなり進化した段階でのみ現われるが）。

人身供儀や聖体拝領によってクンダリニー覚醒を得る可能性も指摘されている（Serrano 1963=1984: 129）。シャクティパット、ディクシャのほか、奉仕や真摯な經典研究など、各人にあった多様な方法でクンダリニーの目覚めとい

う一地点に到達しうる（Rama 1979=1983: 36-40）（Ossoff 1993）（Ambert 2008: 100-3）。区画された外部のエネルギー（気、プラーナ）を召還し照射するクンダリニー覚醒のための霊的实践は「随意の一時的な呼び水の刺激」、エンジンやダイナモのスターターのものである。ヒーリングエネルギーの召還は随意だが、エンジンを持続的に稼働させるかどうかの決定権はクンダリニーが握っている。一度エンジンが始動すると、あとは分離と貸借関係を超越したエネルギーが、各自が努力して呼ぼうと呼ぶまいとここんとあふれでる。それは、各自の神経組織や心理的な発展段階に応じて「自動的」にほとぼり出る（Mookerjee 1982: 69）。

先行文献には、クンダリニーの意図的作為の主体的な覚醒統御技法を論ずるものが多い。しかし、デュルケムが集合意識の特徴として指摘するように、クンダリニーは根底で重なり合い結びついて合一している絆であり、人為的努力を超えた集合的なものである（巻口 2008）。自らのクンダリニーの目覚めが、配偶者などの周囲に影響を及ぼし、周囲の炎を刺激する（Genevieve 1991: 23）。同時に、周囲のクンダリニーの覚醒が自分自身のクンダリニーを刺激する。通常は、高レベルでクンダリニーが活性化している導師は周囲の人に無意識に影響を与えているが、磁石が特定の金属のみをひきつけるように、準備のできた弟子のみが影響を受けるに過ぎないという（Rama 1979=1983: 41）。師のクンダリニーが呼び水となり、各々は全身感覚として自らを知る。福音をもたらすのにもはや言葉（幻視や自動書記）は要らない（Arundale 1962=1976: 65-9）。このようなクンダリニー浴による連鎖的覚醒は聖地や特定の導師の周囲という場所的なものだけではなく、世界規模での時代的なものも想定できる<sup>18)</sup>。共通の源泉からの圧力が諸個人の全身に等しくかけられ、万人は不随意的に、一斉に振動し気づきはじめ、あるいはPKSになりはじめる。ユングがいうようにヌーメンは人が呼ぼうと呼ぶまいと「自律的」に現れ（Progoff 1953: 161-2）、彼の意識領域にやってきて分け入り彼の人生に介入する。クンダリニーの繁殖・増殖の程度は、「天の恩寵による」のであり（Jung 1932=2004: 84）、個人的努力（マントラ）の及ばない（effortless）、社会的、歴史的な運行によるものであり、高度に自然発生的（spontaneous）で運命的なものである（Selby 1992: 190-2）<sup>19)</sup>。それはクンダリニーの意思により、現れる時期にしか現れない。デュルケムは、個人の主体性・優位性を安易にもち出さず、機が熟した段階での集合的沸騰＝クンダリニー集団覚醒を指摘している<sup>20)</sup>。

## 8. 「そうである、そうでない」、クンダリニー

覚醒による上位チャクラへの到達はより大いなる宇宙的冒険への参加であり、それ自体は空、無、寂であるといわれる（Mookerjee 1982: 83）。デュルケムの理論（中

島 1997) と身体感覚を踏まえれば次のように表現できる。クングリニーは、狭く限定されず戯れに目標もなくただ拡がるために拡がり、震え、動き発展して止まない「強烈な生命」(vie intense) である。それは、時に目的意識性をもって活性化され出口＝意味を求める。それは、個人に宿り個人の心身を通して生きるが、個人とはまったく別種の、個人より優越した外部の源泉に由来する(拘束的な)力であり、誰もがモノとして同じように触れることができる。だがこれも近似的表現であると思われる。ユングのいうように「クングリニー＝まったく認識不可能な何か」(Jung 1932=2004: 85)、「超言語的」(trans-verbal) (Mookerjee 1982: 83)、「表現不可能」(ineffable, indescribable) (Matt 2002: 121) (Greenwell 1990: 2, 69-73) というべきだろう。クングリニーは意味解釈を超えており、それをどう言語的に表現してみても常に無力感がつきまとう。だから、私はクングリニーを「それである、いやそうではない(否)」といわねばならないし、中身について言語で人に伝えたいと思う気持ちも萎えてくる。クングリニー覚醒が深まると、その存在から膨大なメッセージがくるのではなく、むしろ言葉を失う。セラーノによれば、自分の内部で結婚を果たすことは、「息吹であり死の黄昏枯れである」。この者は、生と死の神秘を体感し、見る者を震撼させ、人を遠ざける山脈のような表情になる。「この蛇と結婚した者は、不思議な、この世ならぬ相貌をもつに至る。彼の顔は、毒に侵されることを楽しんだものの落ち着きをたたえ、全身に死の静けさを写しだす。その身は夢幻なる水の中にあって、神の魚とともに泳いでいるかに見える」(Serrano 1984: 10-11, 134-5)。感情や表情をもってしてもそれを表現し得ない。このようなクングリニー覚醒によって普段の喜怒哀楽、従来のエゴが減却されるのではない。それゆえ万事に対して無条件に寛容にはしない。覚醒が本格化すると、何があっても本質的には何も考えていない愚かな、あるいは豪胆な人間に変わってしまったかのような感じを自分も周囲の人ももつが、従来の短所や現実的な喜怒哀楽が消えうせるわけではない(それは表現されなければブロックになる)。

## 9. 「下からの社会改革」の真意

十分で完全なクングリニー昇騰状態において人はそれぞれ木の葉のようである。葉の一枚一枚は、自らが枝を通じた一つの生命であることが感覚的に分からない状態では孤立し対立する。だから葉っぱ同士で会話をし、合意を得ようとする。だが、対話をしても相手の真意は知りえない(ブラックボックス)。自分の道徳に固執し合意を得ようと言語を用いて努力するが、ルーマンによればこれは同調圧力であり想起可能な共有経験がなければ皮肉にも更なる対立や分化を促す(巻口 2008)。しかし、人は散る前に自らの体の中心の葉脈＝背骨に意識を集中する。すると葉脈が

枝に幹に根に大地に繋がり、それは一如で不朽であると知る。一方の葉が他より優位であることはない。個性のある各人に顕勢化するの、局所的な名をもつ諸神ではなく、非人称(impersonal)の存在である。R.ベラーは20世紀後半からの霊性や神秘主義を、気まぐれで自己中心的な私秘的体験の追求に終わり、社会や市民精神にコミットしないものであると主張するが(Bellah 1985=1991: 297-8)、そうした柔な神秘の奥に隠された堅固な神秘、不可視の背骨であるクングリニーの無規制的な盛り上がりという動き＝力によって人は自分の意に反してまで突き動かされる。そして次第に諸物同根性が身体感覚として明かされる。この垂直的動きによって、それ自体無目的なクングリニーは、単に各自に一方的に盲目的服従を要求するような外的拘束力ではなく、非人称の神＝一つの社会への尊敬と愛着という明確な理由を明かし、各人を内面から合理的に魅了する共同価値としても機能する。あらゆる具体的差異にもかかわらず、各々はそれ以上に高められ禁忌に囲まれ崇拜対象となる。これが、具体的人間に付加された抽象的「人格崇拜」(le culte de la personnalité) という相互行為儀礼に繋がる。万人は、もはや直接の知り合いでなくても、抽象的に繋がっているという明瞭な身体感覚に基づいて支えあう。これが社会学におけるシティズンシップ(市民精神)や近代市民法の理念(自由、平等、博愛)を成り立たせる各々の心的メカニズム・動機となる(巻口 2004)。いまや、各人が等しく一つの有機的全体に欠かせない「諸機能」(organe) であることが知れ、共同体とよばれる一つの社会生命が具現される。無明の人類史のなかで必然的に秩序原理となってきた言語文化と抑止的法(droit répressif)の外的な同調圧力による「機械的連帯」＝組織的管理が不要になる。デュルケムが繰り返して指摘してきた無機的な機械的連帯(solidarité mécanique)から有機的連帯(solidarité organique)への移行、日常を問い直す非日常＝集合的沸騰(effervescence collective)における下から沸き起こる社会の道徳的再建、諸機能の配置の正常化(＝復原restitution)や人格崇拜とは、ハバースマス以来、現代社会学で広くそう考えられているように、日常的、意識的で合目的なもの、骨の折れる試行錯誤を経た、自由で公正な手続きにおける討議、言語的コミュニケーションを通じ形成された理性的合意を通じた改革ではない。それは、一種独特(sui generis)な「創発特性」に関わるもの、つまり諸個人の意識の「化合」＝連鎖的覚醒によって、言論の及ぶ更なる下方、意識の彼方から一斉にクングリニーが盛り上がり拘束的に、あるいは身体感覚として人間観を刷新することから始まる無論の社会変動のことである(巻口 2004, 2008)。この生成するべくして生成するとしか言いような社会変動をG.クリシュナはクングリニー覚醒による「無血の社会革命」とよぶ。ソヴァツキ(2009)はクングリニーのもたらす人間関係の調和や均衡



についてヴェーダ (*Vasudhaiva kutumbakam*=The world in one family) を参照し主張する。彼は、クンダリーニーがイダとピンガラという男女性の一つの源・出自に結びつくところから、男女が互いに尊重する態度が生まれ、また生涯にわたる円満な結婚や社会が生まれる、あるいは稀なケースだがサニヤシントよばれ梵行(独身禁欲)を積み悟りに達するフルタイムのヨギが生まれると考える。ロウチャコヴァによれば、クンダリーニーが横隔膜上のヴィシュヌ結節よりも下にとどまる場合、我々は相手を意識をもたない単なる物体として扱う傾向にあるが、結節の上にまで到達すると、今度は相手を深みをもった複雑な意識として認識し接することができるようになる(Louchakova 2009: 104-5)。下方チャクラにおいて感情(や欲望)の解放を促す行動へ否応なしに人を駆り立てたクンダリーニーは、その行動による環境変化に満足し完全に上昇し、上方チャクラを越した後にはじめて無論の博愛へと人を導く。クンダリーニーは、紛争を促すと同時に止めさせる力である。破壊の後に創造し維持する。上位に到達すれば、動植物や草花など森羅万象に対する自己愛的心情も生まれる。デュルケムにあつては日常が日常を問い直すのではない。非日常が日常を問い直す、無論が言論を支え問い直すのである。

### おわりに

自分の内奥で徐々に圧力を高め、今や無視しがたい勢力に至ったクンダリーニー、その不可逆的で途切れない凄まじさ、堅固さ(invulnerability)には日々圧倒されてしまう。二重のリアリティー。二重の人間。これまで意識の彼方にあったあの微かなマグマがせり上がってくると否応なく変化を迫られ、言語を介さず背骨を中心とした体感として「匿名的な繋がり」が明かされ、従来自分もっていた世界観と欲求が脱中心化する。分化の極みにおいて、計り知れない何者かがやってきて自分の内奥からあらわれる。PKSの嵐の後にはあるが、閉じて狭く生きてきた自分が貫かれて一部になり始める。同時に、社会は、諸個人の連鎖的覚醒という動きによって、自らが万人に共通し跨っているということを明晰に意識する。

デュルケムが人々の心にアノミーやエゴイズムの風土病的蔓延をみて1世紀が経とうとする。今日、我々の物質文明には限界が見え隠れしている。だが、第一級の困難や社会矛盾を潜り抜けてこそ到達できる地平もまたあるのだろう。八方塞の状況は人を中心へと向かわせよう。この意味で実社会に身を置き粗末に扱われ過労死などと隣りあわせに生きる現代人はエンジンがかかるまで一時地下で一番スピリチュアルな実践を積んでいるといえるのかもしれない。それでもなお、ルーマンが指摘するように、閉じたシステムである個人意識や現代社会は境界維持的に自律運動を続けようとする。だが、デュルケムによれば集合意識の意識化による開かれた社会は、社会=神の呼吸であり波と

いえよう周期的なものである。

「古い神々は、古い、あるいは、死に、しかも、他の神々は生まれていないのである。(中略)しかし、この不確実と激動の状態とは、永遠に続くものではない。そこに、新たな理想が発露し、しばらくは人類の指南となる新たな創造的興奮の時限を、われわれの社会が再び知る日がくるであろう。」(Durkheim 1912=1942: 343)

デュルケムにあつては、社会は日常と非日常(集合的沸騰)の間でのゆらめき(oscillation)、周期性(périodicité)をもっている。名のある各々は同時に名のない普遍であるという匿名的人格性の全身感覚を引き出す呼び水刺激とは、歴史的な喪(deuil)であり、またクンダリーニー自身の知的な意思=人にとっての不随意性である。単に苦しみという条件だけでは、そこで人は堂々巡りを始め洞察を得ない。向こう側からの働きかけがあつてはじめて、従来の全てが相対化され、汝自身がだんだんと知解され、共有される。また、各々は死を恐れず自信をもって行動することができる。PKS予防緩和策として食事管理や代替療法等の積極的な準備をし、ある地点まで辿り着くことができるが、人格崇拜による調和的環境は不可欠要素であり、そのためには世界中の万人が集集し言語的に討議し作成するのではなく(それは無理である)、逆説的にも「外在的」で「拘束的」なクンダリーニーの連鎖的覚醒による(PKSや波乱の後の)全身感覚的な無論・無血の変革が欠かせない。真の社会的合意は人の内奥にあつて発見されるものであり、人が創造するものではない。PKSにおいては、我慢したり努力したりあがくことを諦めるところにまで連れて行かれる。もうだめだと放り出し、恐れることなく身体に任せると力が抜けエネルギーが通ずる経験をする。上げたい下げたいという思考が皮肉にも、内奥の公共領域から自分の意識を逸らし切り分けるブロックになっている可能性がある。

### 注

- 1) サンスクリット語のローマナイズの際の記号を省略する。
- 2) グノーシス主義では、下降した魂(女性的属性)が中間界と下界(身体)に捕らわれ、自己の本性を忘れてしまうが、至高神の啓示により目覚め帰還し、この宇宙全体は解体されたと考える。救済され復活するのは肉体ではなく魂である。
- 3) 練精化気、練気化神、練神還虚という気功法のプロセスには、上丹田における天地人合一の境地が含まれるが、これに関しては今後の検討課題とする。
- 4) Saraswatiはイダとピンガラは90分から180分ごとに優位が入れ替わり、普通はこの入れ替えの瞬間にのみクンダリーニーが潜在力として現われうること、またこのアンバランスが食習慣を含む生活習慣の乱れにより引き起こされ、同時に社会文化や政治に反映されること、これを調和させるのがヨガの

ゴールであることを指摘する (Saraswati1984: 77, 334-7)。

- 5) 逆に左側に症状が集中するケースもある (Mookerjee 1982: 91)。
- 6) 精神的ショックの4ヵ月後の皮膚炎の状態。背骨と胸の痛みだけでなく、鎖骨下の皮膚の炎症部分と仙骨までの間に太いピアノ線が押し込められているような強い持続的緊張感があり、これは週単位での強弱の周期を伴いながら更に数ヶ月かけて快方に向かう。炎症箇所は骨盤の両脇にもほぼ対称的にあられ、時間の経過と共に外側か上方へ移動する。
- 7) 他にも様々な個性的な症状が指摘されている (Greenwell 1999)。小周天における真気運行の過程において、やはり体温上昇、大汗、唾液分泌の増大、体重増加、雑念、動悸、頭痛、不安緊張、不眠、腹部膨満感、疲労、電流の感覚、しびれ、寒く熱い感覚を伴うことが指摘されている (趙 1997: 76-90, 130)。
- 8) チベット死者の書では下方へのエネルギー解放が輪廻に関わると考えられている。
- 9) 本山は両者を段階的に区別している。
- 10) 彼らのクンダリニー尺度 (11項目) の多くは主観的なヴィジョンや感覚である。クンダリニー尺度の内容を客観的なものに絞れば、異なった結果が得られると思われる。
- 11) はい、いいえ、わからないの3段階尺度。臨死体験を自身では否定しているが客観的に臨死体験の特徴を示していた被験者にはクンダリニー症候群Indexの7.7項目が当てはまった。臨死体験をしたと自ら主張してはいるものの、客観的にみて臨死体験の特徴から外れていた被験者には同指標の4.5項目が当てはまるに過ぎなかった (Greyson 2009: 178)。
- 12) 目覚めたクンダリニーの抑圧は、薬物によらないものを含めて死を招くとされるが (Grof 1992)、これに半ば成功した人も報告されている (Mookerjee 1982: 91)。
- 13) Ossoff (1993) は、一定期間の記憶を全く失った女性の症例をPKAと位置づける。
- 14) クンダリニーにより体は熱を帯びていても実は脾気虚の場合があり、この際、熱を寫する漢方薬を処方すると症状が悪化することがある。
- 15) 私は、英国のOle Gabrielsen氏が開発したマスタークツミによるクンダリニーレイキ遠隔伝授でクンダリニーが頭を貫通し正常化した経験をもっている。だが、クンダリニーの正常な流れには、怒りなどの感情の解放、外的環境の調整、手放すこと、諦め、健康的な思考や社会などが求められると考えられるために、一見無関係と思われるようなワークを含めた全体的なアプローチが必要であると思われる。緊張が多少ほぐれてクンダリニーが侵入可能な蟻の穴と時間が最低限必要である。また、瞑想状態でのヨガの姿勢と発汗法が滞ったエネルギーを排出するのに必要である。布団の中で酸欠サウナ状態で右や左を下にして横になることが私には適していた。
- 16) プラトンのイデア論に通ずる考え方である。
- 17) Walsh (1979) は、激しい瞑想によって潜伏していた病が顕在化しようと指摘しつつも、心理的に洗練され洞察や共感性が得られる可能性を認めている。
- 18) Genevieve (1991) によれば、同居人の中での連鎖的覚醒は珍しい現象ではない。私は、同居の家族が持続的なPKSになった経験をもつ。デュルケムは、未開社会の祭儀における参加成員の感染的な人格変換を念頭に、諸個人の狭間からの

一つの集合力のせり上がりを想定している。

- 19) Bentov (1988) やGenevieveはクンダリニーへの影響要因として天体の運行を含めている (Genevieve 1991: 10-1)。
- 20) カバラではマルクトを中心とした肉体的意識をもちながら「神の無制約な火花」(Ein Sof) に目覚める訓練がある (Matt 2002: 11)。ここでは、修行の成果を日常的自己の個人的努力による成功と捉え慢心しない状態が重要である (Butler 1962=1979: 155-6)。

#### 参考文献

- Ambert, A., 2008, *The Seven Powers of the Spiritual Evolution*, Xlibris.
- Arundale, G., S., 1962=1976, 岡崎正義訳『クンダリニー ある奥義体験』竜王文庫
- Ashby, M., Sebai, 1996, *The Serpent Power*, LCCPD.
- 安藤治, 1993, 『瞑想の精神医学』春秋社
- 荒井献, 大貫隆, 小林稔, 1997, 『ナグハマディ文書 I 救済神話』岩波書店
- \_\_\_\_\_, 1998, 『ナグハマディ文書IV 黙示録』岩波書店
- Avalon A., 1974, *The Serpent Power, The Secrets of Tantric and Shaktic Yoga*, Dover Publications.
- Bellah, N., R., et. al., 1985=1991, 島蘭進, 中村圭志訳『心の習慣—アメリカ個人主義のゆくえ』みすず書房
- Bentov, I., 1988, *Stalking the Wild Pendulum*, Destiny Books, Rochester.
- 趙宝峰, 1997, 『ひとりのできる健康気功』日東書院
- Cousens, G., 1986, *Spiritual Nutrition*, North Atlantic Books.
- Dale, C., 2009, *The Subtle Body*, Sounds True.
- Durkheim, 1912: *Les Formes Élémentaires de la Vie Religieuse*, Librairie Générale Française, Paris (=1941, 1942, 古野清人訳『宗教生活の原初形態』上・下 岩波書店)
- \_\_\_\_\_, 1924=1985, 佐々木交賢訳『社会学と哲学』恒星社厚生閣
- Genevieve, P., 1991, *Kundalini and the Chakras*, Evolution in this Lifetime, Llewellyn.
- Greyson, B., 1993, The Physio-Kundalini Syndrome and Mental Illness, *The Journal of Transpersonal Psychology*, 25/1.
- \_\_\_\_\_, 2000, Some Neuropsychological Correlates of the Physio-Kundalini Syndrome, *The Journal of Transpersonal Psychology*, 32/2.
- \_\_\_\_\_, 2009, Near Death Experiences and the Physio-Kundalini Syndrome, *Kundalini Rising*, Sounds True.
- Goretzki, M., Thalbourne, M., Storm, L., 2009, The Questionnaire Measurement of Spiritual Emergency, *The Journal of Transpersonal Psychology*, 41/1.
- Greenwell B., 1990, *Energies of Transformation*, A Guide to the Kundalini Process=2007, 佐藤充良訳, 『クンダリニー大全—歴史、生理、心理、スピリチュアリティ—』ナチュラルスピリット
- Grof, S., and Grof C., 1992, *The Stormy Search for the Self*, New York: Tarcher/Perigee Books.
- Irving, D., 1999, *Kundalini*, Serpent of Fire, Jaiko Books.
- Johari, H., 2000, *Chakras*, Energy Centers for Transformation, Destiny Books.
- Jung, C., G., 1932=2004, 老松克博訳『クンダリニー・ヨーガの心

- 理学』創元社
- \_\_\_\_\_. 1952=1992, 野村美紀子訳『変容の象徴』上, 筑摩書房
- \_\_\_\_\_. 1999, 林義道訳『元型論』紀伊国屋書店
- Krishna G., 1983, 「クンダリーニ現象の意味」ジョン・ホワイト編, 川村悦郎訳『クンダリーニとは何か』めるくまーる社
- Kumar R., 2000, *Kundalini for Beginners*, Llewellyn pub., 井上宏訳, 2005, 『クンダリーニ覚醒術』心交社
- Louchakova O., 2009, *Kundalini and Health, Kundalini Rising*, Sounds True.
- Mathers, M., 1970, *The Kabbalah Unveiled*, Weither Books.
- 巻口勇一郎, 2004, 『デュルケム理論と法社会学－社会病理と宗教、道徳、法の相互作用』信山社
- \_\_\_\_\_. 2008, 「無意識より沸きあがる集合力による共同意識形成－デュルケム、ヴェーバー、ルーマン、ユングにおけるトランスパーソナルな心理と社会」『トランスパーソナル心理学・精神医学』8/1 日本トランスパーソナル心理学・精神医学会
- Maslow, A., H., 1964, *Religions, Values, and Peak-experiences*, Ohio State Univ. Press., 1972, 佐藤三郎、佐藤全弘訳『創造的人間』誠信書房
- Matt C., D., 1996, *The Essential Kabbalah*, HarperOne Publishers.
- \_\_\_\_\_. 2002, *Zohar*, Annotated & Explained, Skylight Paths.
- Mookerjee, A., 1982, *Kundalini*, The Arousal of the Inner Energy, Destiny, Rochester.
- Morgen, R., 2008, *Kundalini Awakening for Personal Mastery*, 2<sup>nd</sup> ed., New Paradigm Media.
- 中島道男, 1997, 『デュルケムの〈制度〉理論』恒星社厚生閣
- 直木公彦, 1975, 『白隠禪師－健康法と逸話』日本教文社
- Ossoff, J., 1993, Reflections of Shaktipat: Psychosis or the Rise of Kundalini? A Case Study, *The Journal of Transpersonal Psychology*. 25/ 1 .
- Progoff, I., 1953, *Jung's Psychology and its Social Meaning*, Routledge.
- Rama Swami, 1979=1983, ジョン・ホワイト編, 川村悦郎訳『クンダリーニとは何か』めるくまーる社
- Randal, P., and Argyle, N., 2006, 'Spiritual Emergency' - a useful explanatory model? a literature review and discussion paper', in PDF, The Royal College of Psychiatrist.
- Regner, V. A., 1999, *Re-examining Christian Conversion Experiences*, Considering Kundalini Awakening and Spiritual Emergencies, Thesis, School of Theology at Claremont, USA,
- Ring, K., 1992, *The Omega Project, Morrow*.
- Sannella, L., 1976, *The Kundalini*, Psychosis or Transcendence? De Vorss and Company.
- Saraswati, S. S., 1984, *Kundalini Tantra*, Yoga Publications Trust.
- Selby, J., 1992, *Kundalini Awakening*, A Gentle Guide to Chakra Activation and Spiritual Growth, Bantam New Age Books.
- Serrano, M., 1963, *The Serpent of Paradise*, 1984, 大野純一訳『楽園の蛇』平河出版社
- 下田僚, 2006, 「スピリチュアル・エマージェンスとしてのクンダリーニの覚醒をみた事例：トランスパーソナル心理学からの知見を援用したカウンセリング」『こころの健康』日本精神衛生学会 21/2
- Sovatsky S., 2009, Kundalini and the Complete Maturation of the Ensouled Body, *The Journal of Transpersonal Psychology*, 41/1.
- Steiner, R., 1958=1996, 『秘儀の歴史』国書刊行会
- 鈴木大拙, 1938=1940, 北川桃雄訳『禪と日本文化』岩波書店
- Turner, W. V., 1976, *The Ritual Process, Structure and Anti-Structure*, 1997, 富蔵光雄訳『儀礼の過程』思案社
- Walsh, R., Roche, R., 1979, Precipitation of Acute Psychotic Episodes by Intensive Meditation in Individuals with a History of Schizophrenia, *American Journal of Psychiatry*, 136/8, August.
- Walters D., 2009, Kundalini and the Mystic Path, *Kundalini Rising*, Sounds True.
- Whitfield, C., 2009, Spiritual Energy: Perspectives from a Map of the Psyche and the Kundalini Recovery Process, *Kundalini Rising*, Sounds True.
- Wilber, K., 1983, *A Sociable God*, A Brief Introduction to a Transcendental Sociology, McGraw-Hill, 1984, 井上章子訳『構造としての神』青土社
- Williams M., M., 2002, *A Sanskrit English Dictionary*, Etymologically and Philologically Arranged, *new edition*, Motilal Banarsidass Publishers.

**Abstract:**

This paper will reveal mainly the social and collective aspects of the energy named Kundalini and the Physio Kundalini Syndrome(=PKS) referring to my spiritual experiences and the social theory by Emile Durkheim. Kundalini is a force beyond our control and description. We comprehend it only by way of no to yes. Essentially, it is an anonymous non-dual intelligence which has its own will to penetrate all differentiated forms into one. This paper also discusses the anatomy of the subtle Nadis and the physiology of the Kundalini. Traumatic emotions such as anger and grief liberate and block the Kundalini simultaneously, which causes many symptoms including somatosensory sensations such as the whole body quaking sensation sometimes with the sound like fizz and mental and psychosomatic symptoms. Experiencing these symptoms that interfere with our daily normal life, what we call Physio Kundalini Syndrome, is the necessary and natural process of purification and dissolution preparing for the genuine full Kundalini rising. In terms of Durkheim's sociology, Kundalini is described as a collective consciousness, a dynamo which reconstructs morality for citizenship to reveal one lineage of every one. Only with the enduring intervention of the invulnerable and involuntary power can ego been localized and man can recover from anomie and get faith. The sparking of Kundalini in one person ignites another person's from around. Durkheim called this universal chain awakening "collective effervescence". The gospel for spontaneous social change is coming from the unconscious without verbal communication in the time of contagious full gushing. We can prepare for the smooth rising by being assertive especially in the stressful situation besides by means of healing modalities such as Kundalini Reiki, Homeopathy, Yogic methods with Sanskrit Mantras and so on. But we shall surrender to the well designed process by the intelligence Kundalini so as to pass

PKS in the end.

**Key words**

invulnerable, enduring and involuntary character of the Kundalini, localization of the ego, spontaneous citizenship through whole body sensation, collective effervescence.

**キーワード**

クンダリーニの堅固さ・永続性・不随意性、自我の相対化、全身感覚による無数の社会変動、集合的沸騰